

第4章 小考 一まやばし城と前橋城北曲輪遺跡一

1 はじめに

以上のように前橋城北曲輪遺跡からは溝、掘立柱建物、井戸、池など古墳時代及び近世から近代にかけての遺構が調査されたのであるが、以下、中世以降の本遺跡の性格について若干の考察を試みたいと思う。

2 前橋城

(1) 鹿橋城・前橋城の城主の変遷

本遺跡はその遺跡名が示すように前橋城内北郭に位置している。前橋城は中世の鹿橋（まやばし）城から発展したもので、伝説によれば惣社長尾氏が築城した石倉城が川欠けで崩れ落ち、これを造り直したもののが鹿橋城であると云う。その築城は長野氏という見方が一般的だが、少なくも長尾方業が箕輪の長野信業と総社長尾氏を挾撃した太永7年（1527）までには整備されていたようである。

関東管領上杉憲政の平井退去後、鹿橋城は小田原の北条（後北条氏）氏康の手に落ちて福島氏、朝倉政成が入るが、永禄3年（1560）に長尾景虎が越山して一旦は長野賢忠を据え、永禄5年には北条（きたじょう）高広を城主としている。北条高広は時の情勢をよく見極め、永禄10年後北条氏に従うが同12年には上杉（越後長尾）氏に帰参、天正6年（1578）の上杉謙信没後の御館の乱で敗れて翌年進出してきた武田方、武田氏滅亡後の天正10年には織田信長配下の滝川一益に従い、本能寺の変で一益が西上すると御館の乱で敵対した越後の上杉景勝に付いた。しかし天正12年北条氏政に攻められて開城。城は北条氏邦の属城となった。

天正18年（1590）小田原の役後に徳川家康が関東に封ぜられると、鹿橋城には平岩親吉が入ったが、慶長6年（1601）には酒井重忠が封ぜられた。17世紀後半頃から「前橋」表記が一般化するが、まだ「まやはし」と呼んでいたようである。酒井氏は9代に亘り鹿橋（前橋）城主であったが、寛延2年（1749）（結城）松平直矩が城主となるものの、川欠けに耐えかねて明和5年（1768）川越に移城。前橋城は破却されて城内東寄りに陣屋が建てられた。下って慶応3年（1863）、前橋城は再築され、松平直克が入城。明治4年（1871）廢藩置県。明治9年の第2次群馬県の発足により県庁となっている。

(2) 中世の鹿橋城

戦国期の鹿橋城は故山崎一先生が予測されていたように少なく現在の県庁周辺以西に在ったことは間違いないようであるが、近年の発掘調査で少しづつ明らかになりつつあるものの未だ明瞭ではない。ただ「石川忠房留書」には一の曲輪には一段高い所があって、これを中心に川に沿って曲輪が並んでいたという記述があり、武田信玄が竹梯子を使って責めさせていることから利根川沿いは崖になっていたことが分る。

後北条氏には総郭という概念があり、本拠の小田原城、或いは本県の館林城でも城下全体を大きく堀や土塁で囲っている。中毛地域の拠点の城であった後北条氏時代の鹿橋城でもそうした総郭を設けた可能性が考えられる。酒井氏時代の『直泰夜話』に「一、前橋の広小路は、平岩主計（頭）殿在城の節、出来候郭なり」という一文があるが、広小路は平岩時代に追加された箇所ということになる。文中の広小路は第1図右寄りの島田郭と大手門の間と想定されるが、島田郭の他、その内郭側の加内曲輪（水曲輪）も形態的に島田曲輪と合わせなければ完結せず、三の丸下のネズミ門前、石川門付近までが本来は大きな馬出になっていたと考えられているので、ここも近世に入ってから追加された郭と判断される。従って後北条時代の鹿橋城は第1図の本丸、二の丸、三の丸、高浜曲輪、鹿橋曲輪等の主要部分と、酒井氏時代の外曲輪の範囲と想定される。

(3) 近世前橋城

平岩時代に広小路が造られたことは既に述べたが、当時の様子はつまびらかでない。しかし『直泰夜話』は「柏木門（中略）大昌院様（忠清）御代、慶安中に出来候由」など、酒井氏2代藩主忠世から4代忠清時代に整備を行い、一応の完成を見たことを伝えている。

酒井氏時代の前橋城（第31図）は折れ等が多い。利根川岸に高浜曲輪、本丸、二の丸、厩曲輪、その東に三の丸、鼠曲輪等が並ぶ主郭部があり、本丸南には三層の天守閣があった。本丸と二の丸は南北は堀で隔て

られるが、東西は堀で仕切られるだけである。三の丸の東から北にかけては外曲輪があり、その北東部に柳原門があって城外に通じ、風呂川と呼ぶ用水堀を引き込んでいる。主郭部の南には（仮称）



第31図 酒井氏時代末期の前橋城縄張り図（山崎一先生作図）

柿宮郭があり、外郭の南から東にかけては加内曲輪（水曲輪）、その東には島田曲輪がある。島田曲輪の南側中程には郭馬出しが付く大手冠木門が在った。

やがて前橋城主郭部は利根川の被害を受けるようになり、宝永3年（1706）年、忠挙の時、ついに本丸西方櫓、高浜曲輪角櫓が崩れ落ちた。再三の利根川改修も実らず本丸そのものが危険となつたため、寛延元年（1748）、三の丸への移転の許可されている。しかし、工事そのものは松平氏に引き継がれたことになるが、寛延4年～宝暦元年（1751）実施のこの工事は三の丸に御殿を新築しただけものであった。

松平氏が入ってからも川欠けは進み、三の丸さえ危険となつた。前橋藩は川越移城を願い出て許可され、明和5年（1770）移城した。前橋城は天守閣等破却され、更地となつた。酒井家の「六臣鐸筆」にはこの時の破却を伝え「石垣ハ悉く鉛にて繋、材木類漆二て継目ゝゝを手厚く附ケ有之」と記している。



第32図 再築前橋城縄張り図（山崎一先生 作図）

(5) 再築前橋城

城を破却に追いやった利根川の洪水は天保年間の郡奉行安井与左衛門の努力で抑えられ、文久3年（1863）、前橋城再築が幕府より許可される。築城資金は町の衰退を歎く前橋の米・生糸商人を中心とする前橋町有志が1万両の築城資金を提供した。しかしその普請は発掘調査によって本丸堀の石垣ですら裏込め石が用いられないなど、見た目の整備に留まっている感もある。

再築前橋城は旧三の丸を拡張して本丸とし、その南西から南に二の丸、北東に三の丸を配置している。基本的縄張りは酒井氏時代のそれを踏襲しつつも、旧島田曲輪、加内曲輪をまとめて外曲輪とし、仮称柿宮曲輪もまとめて南曲輪に一括し、外縁ラインは直線、或いは大きな曲線で単純化している。天守閣は無く、櫓台には櫓に代って砲門が設置されるという幕末期の新戦法に対応した和洋折衷の実戦的な構造の城であった。

3 調査区に於ける変遷

(1) 中世段階での本遺跡の調査区

こうした変遷を経た前橋城であるが、本遺跡調査区の変遷はどうだったのだろうか。先に述べたように中世の状態はつまびらかでなく、北条（きたじょう）氏時代の本遺跡周辺は既に城下町となっていた可能性が考えられる。しかしそれが侍屋敷なのか、町屋或いは畠地であったのかは不明である。

また後北条時代には総郭を造っていた可能性が考えられるので本遺跡は城下の一角に含まれると考えられるが、やはり本遺跡付近がどのような状態であったかを確認することはできなかったのである。

(2) 酒井氏時代の本遺跡の調査区

本遺跡出土遺構のうち1・3号溝、及び1～3号建物を平岩氏～松平氏前期の時代の遺構として把握しているが、次に酒井氏時代、正保元年（1644）の城絵図を使って近世前期の本遺跡付近の状況を探ってみたいと思う。第33図上の図は正保城絵図を現代の前橋市都市計画図に会わせたものである。多少のズレはあるが、下馬將軍と呼ばれた藩主酒井忠清が若かった頃、本遺跡付近が侍屋敷となっていたことが分かる。

小規模な堀である1・2号溝は飯島伝七と柴源太夫の屋敷堀と想定されるが、或いは柴源太夫と神原九右衛門の屋敷堀の道路東側側溝であった可能性もある。中世的な掘立柱建物が想定される柱列は飯島伝七屋敷に伴うものと判断される。

居住者である飯島伝七、柴源太夫、或いは神原九右衛門がどのようなクラスの人物であるのか現時点で確認できなかったが、少し遡る寛永初頭の同姓の神原五郎左衛門、飯島弥兵衛が共に60石（石高は寛永13年（1636）に急増する）を給しているので、中級武士ではなかったかと思われる。

(3) 陣屋時代の本遺跡調査区

次に陣屋時代であるが、陣屋時代の状況は田代よし子氏所蔵の図によって窺うことができる。

同図によると柳原門から南に続く通路沿いに屋敷が並んでいる。本遺跡付近は空き地か、或いは土地の管理を考えれば畠地となっていた可能性があるが、残念ながら遺構としては確認できなかった。

(4) 松平氏時代の本遺跡調査区

最後に再築前橋城時代の状況を見てみたい。第33図下の図は再築前橋城図を現在の前橋市都市計画図に当て嵌めた前橋市教育委員会作成図に、明治3年の屋敷の居住者を書き込んだものである。再築前橋城の時代、